

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第618号 平成25年9月30日

老進気鋭

総務省が、先日の敬老の日に合わせて発表した人口推計によると、2013年の65歳以上の高齢者は3186万人（対前年比112万人増）、総人口に占める割合は25.0%（対前年比0.9ポイント増）と、いずれも最高を更新したとの事です。

今や4人に1人は65歳以上の高齢者という事態の中で、社会保障制度を支える現役世代の負担は重くなるばかりです。私も、その4分の1の中に入っておりますので、敬老の日を迎える度に、内心忸怩たる思いが湧いて来ます。

高齢者本人の立場からすれば、敬老の日をどのような気持ちで迎えるべきなのか、多少の戸惑いがあり、頭もモヤモヤしていたところ、作家の森村誠一氏が昨年1月号の文芸春秋に「老進気鋭」という一文を載せていた事を思い出しました。

その内容を少し紹介しましょう。

平均60歳でリタイヤしたとしても、あと20年ある。つまり、それまでは人生を仕込みの期間と現役と2期に分けられていたのが、余生という人生のおまけがついた。

1年や2年であれば、おまけで済むが、20年となると余った生ではなく、人生を第3期として、如何に生きるべきかが問われるようになる。

まだ十分に使える能力の社会的活用を考えるべきであろう。これは脱サラに似て非なるものであり、人生第3期の転身であり、人生2毛作以上を目指す再スタートである。

だいたい保険や年金は相互扶助の精神を踏まえている。これまでせっせと身を削るようにして働いてきた老人が働けなくなったとき、次の世代がこれを支えるのは、時の流れに乗って生き、そしてこの世を去っていく人間の歴史が編み出した輪番制である。

森村氏がいう様に、保険や年金は、相互扶助の世代を超えた輪番制だというのは、確かにその通りだと思います。しかし、そうはいつでも、高齢者の生活を現役の世代で支えるという事が難しくなっている事もまた現実です。

ではどうするか、結局のところ、高齢者も自立して生活する事が望ましいという事だと思います。

自立するというのは、現役時代の様に沢山の金を稼ぐという意味ではありません。

高齢者の方々も、それぞれの能力に応じて生涯にわたって社会に参加して行く事が望ましいという事であり、同時に、そうした高齢者の能力を活かせる社会であって欲しいとも思っています。

森村氏は、「老身気鋭」という一文の中で「高齢になっても一定の仕事が続けられる社会が長寿社会と呼べるだろう」と述べています。日本の社会をそうした名実共に長寿社会といえる社会にする事は、超高齢化が進む中で、現役世代の負担を押さえながら、持続可能な医療や福祉制度を構築していく為にも重要です。

高齢者が長寿社会で生き残る為にはどうすべきか、森村氏は「老進気鋭」の中で次の様に述べています。

個人差はあるにしても、60の定年は組織の制度であって、まだ十分働ける能力をもっている。

定年は、組織の体制上発案された能力の死刑である。その死刑を制度として甘んじて受け入れる者と、制度は認めても、死刑を断じて拒む者との間に定年後の差が開く。

前者は大人しく横町のご隠居と化し、後者はまだ十分働けると荒野の狩人となる。ご隠居と狩人の違いが、シニアの社会的ニーズの違いとなって現われる。

老いに甘える人と、老いを拒む人との違いは、人生第3期を文字通り余った生(余生)にするか、嘗ある生(嘗生)にするかの分岐点となる(下線は筆者)。

なかなか厳しいご意見ですが、でも、おっしゃっている事は分かります。

それにしても、現役を離れてなお、生涯現役の人生を生きて行くにはどうしたら良いのでしょうか。

この点について森村氏は、次の様に提案しています。

現役を離れても、

- ・健康である事
- ・多少の経済力がある事
- ・配偶者がいる事
- ・生産性(社会的な活動に参加)を持つ事
- ・趣味を持つ事
- ・お洒落をする事

だと述べています(「老進気鋭」から)。

いちいちもっともな事ですが、「配偶者がいる事」というくだりにはドキリとしました。全くその通りだと、今更ながら感じています。

結局のところ、生涯現役でいられる秘訣に特別なものはなく、要はそれぞれの意思次第という事に尽きる様です。(塾頭：吉田 洋一)